

序

ポスドクは楽なものではありません。自分の研究者生活を振り返ってみても、ポスドクとして過ごした4年間はひとときわ困難な時期でした。取り組んでいた研究は大好きでしたが、小さい子供を抱え、月々の支払いも多く、長期的なキャリアの見通しはありませんでした。

ポスドクは過渡期で、学生時代を後にしてアカデミックなキャリア、あるいは最近になって増えつつあるより広範な仕事へと巣立っていくステップなのです。また大きな不安を抱える時期でもあり、契約は任期付きで資金は不足気味、博士号を取得した喜びも束の間、仕事は突如としてつまらない繰り返しの思えて、自分の選んだ道に疑いを持つようになるのです。

しかし、近年はこのような事態に進歩が見られます。大学の研究におけるポスドクの多大な貢献に対する評価と、専門的な支援と助言の必要性に関する認識の高まりが相まって、ポスドクの生活と仕事の環境が目に見えて改善されてきました。ポスドクが安価な消耗品として不当な扱いを受ける、忘れられた「実験室の猿」だったのも昔のことです。

私は長い間、大学に所属するポスドクに対する支援を強化することに情熱を注いできました。現役の研究者であった30年の間、50人以上のきわめて優秀な若い男女のポスドクと一緒に仕事をする機会に恵まれ、彼らから多くのことを学び、その後の彼らの成長を大いに誇りにしています。ですから、2013年にインペリアル・カレッジ・ロンドンに着任し、ポスドク・コミュニティへの支援と彼らの成長に対するきわめて真摯な取組みを知って嬉しく思いました。ここのポスドク開発センターはこの分野の模範だと思います。

インペリアルのポスドク開発センターは、総勢2400人以上のポスドク・コミュニティに個々の必要性に応じたさまざまな助言とサービスを提供しています。キャリアに関する助言や履歴書作成ワークショップから、人脈形成の機会提供や「家族連れに優しい」取組みまで、センターは非常に優れた支援体制を備えています。このセンターの成功は、センター長リズ・エルビッジ博士の傑出した、そして人を奮い立たせるようなリーダーシップによるところが

大きいと言えます。リズはこのインペリアルでも国内の各地でも積極的に発言し実績を上げているポスドクの支援者です。ポスドク・コミュニティーと「一緒になって」働き、特に彼らの心配事だけでなく期待や願望にも耳を傾けることで、彼女は強固できわめて効果的な支援体制を築くことができました。

ポスドク開発センターの成功は、少なからず本書の共著者でもある次の人々のおかげでもあります。

キャロル・スペンスリー博士はセンターの初代コンサルタントでした。彼女はポスドクからインペリアルの研究開発員へと難なく転身しました。インペリアルで免疫学のポスドクを経験することで得た専門知識と、研究の要請やキャリアの移行、そして高等教育（HE）の世界で働くことへの情熱を調和させる経験とを兼ね備えています。

エマ・ウィリアムズ博士は、ポスドク開発センター創設以来の外部コンサルタントです。彼女は、ケンブリッジ大学での以前の仕事で示した研究者の能力開発に関する創造的な才能で得たアカデミックな信頼性と、あらゆる分野から助言を求められる親しみやすいスタイルとを併せ持っています。

現在、リズ、キャロル、エマは、他の研究機関を訪れてインペリアルで開発された知見と優れた実践を共有させて欲しいという求めに引っ張りだこになっています。私は、今その経験と知識がこの貴重な本を通じてより広範な人々に伝えられるようになったことを喜んでいます。本書は現役のポスドクあるいはその予備軍にとっての「入門書」として完璧なだけでなく、ポスドクの管理責任者である研究者にとっても必読書だと思います。

ジェームズ・スターリング教授

大英勲章第3位（CBE）、王立協会フェロー（FRS）

物理学研究所フェロー（FInstP）、インペリアル・カレッジ・ロンドン学長